

乃木將軍夫人（榛葉竹庭）

短歌 出でまして かえります 日のなしときく

けふのみゆきに あうぞ 悲しき

遽に 雙珠を 失うも 神を 乱さず

一たび 晏駕に 逢うては 涙漣 頻り なり

従容として 節に 殉ず 哀音の 裏

彝鑒 千秋 萬民を 照す

遽失雙珠不亂神 一逢晏駕淚漣頻  
従容殉節哀音裏 彝鑒千秋照萬民

解説 薩摩藩士、湯地定基ゆじさだもとの四女、静子は十九歳で当時東京第一聯隊長の乃木希典と結婚。明治十二年に長男勝典が、同十四年に次男保典が出生した。明治三十七年二月、日露戦争が勃発し、先ず長男が戦死し、続いて二男が戦死を遂げた。夫人は將軍と共に明治四十五年九月十三日、午後八時、明治天皇の靈輿が宮中を御発引になられる合図の号砲の中に、従容として殉死したのであった。

語釈 ※雙珠 二人の勝れた兄弟。 ※神 心。 ※晏駕 天皇の崩御。 ※涙漣 涙が流れること。 ※殉節 節義をつくすために命をすてる。 ※彝鑒 人道の鏡。

通釈 俄に二児を失っても心を乱さなかつた夫人も、天皇の崩御に接しては涙がとめどなく流れるのであった。哀しい号砲の響き渡る中に、従容として節義に殉じた行為は、人道の鏡として万民の上を照し続けるのである。